

リゴレット

10/3 (木) ~ 10/22 (火)

会員郵送受付締切 5/5 (日)
会員販売期間 5/26 (日) ~ 6/4 (火)
一般発売日 6/8 (土)

アンドレアス・クリーゲンブルク



客室の扉の向こうは……
現代のホテルを舞台にした
「リゴレット」

——二〇〇九年の「ヴォツェック」は、どうしようもない絶望、そこから生まれる悲劇を象徴的に描かれた、美しくも心の奥底に響く舞台でした。今回はヴェルディの「リゴレット」です。今までに「リゴレット」を演出されたことはありませんか？

「リゴレット」を演出するのは今回が初めてです。ヴェルディの作品では、これまでにベルリン・ドイツ・オペラで「オテロ」を演出したのみで、新国立劇場での「リゴレット」がヴェルディのオペラの二作目になります。ヴェルディのオペラでは、愛、暴力、復讐、死がテーマとなっていることが主だと思いますが、大変にドラマチックですね。

「リゴレット」演出の構想を考える際、ストーリー上ポイントとなった事象や場面などはありませんか？

K・・・全体的なこととしてまず申し上げたいのは、「リゴレット」はとても過激な物語

であるということです。ヴェルディは「リゴレット」作曲中から検閲に悩まされていましたが、リブレットは検閲官に激しく非難されていました。私は今回の演出にあたり、この過激な物語を現代の規範に照らし合わせてみようと思ひ、まず時代設定を現代にするアイデアが浮かび、私たちの時代のある街での物語としてみました。特定の街ではありません。東京でもベルリンでもニューヨークでも全く構わない、現代のある街という設定です。そこで社会のモラルとは何かを問うてみようと思ったのです。というのは、「リゴレット」ではモラルのカテゴリーが崩壊していて、裏切られたり、騙されたり、無実の罪で牢獄に入れられたり、という社会です。それを現在の私たちの社会、そこに生きる人間と「リゴレット」の社会とを比べてみようと思ひました。そして私たちの社会における権力はどうかあるかを問おうと思ひました。

なるほど、現代の社会と対比しながらモラルや権力とは何かを問う、ということですね。では、それをどのように描くのか、舞台について少し具体的に教えてください。

K・・・時代設定は現代で、ホテルを舞台にします。ホテルのドアは街に通じていますが、ホテルの中では匿名の人たちが、つまり互いに名前も知らない人たちが会おうとするところもあるわけです。そしてホテルの各部屋への多くのドアは、知らない人たちが出入り入ったりするので。ホテルには暗い廊下があり、そこを絶えず、いろいろな人が行き来し、リゴレットも廊下を行ったり来たりします。舞

二〇一三／二〇一四シーズンのオープニングを飾る「リゴレット」新制作を演出するのは、二〇〇九年バイエルン州立劇場との共同制作で、「ヴォツェック」を見せてくれたアンドレアス・クリーゲンブルク。昨年夏ミュンヘン・オペラ・フェスティバルで「ニーベルングの指環」を演出し、大きな話題となったドイツの鬼才演出家が、再び新国立劇場にやってくる。ヴェルディ・イヤールの今年、名作「リゴレット」をどのような視点から描くのか、クリーゲンブルクに演出のコンセプトをうかがった。

ルディの作品では、これまでにベルリン・ドイツ・オペラで「オテロ」を演出したのみで、新国立劇場での「リゴレット」がヴェルディのオペラの二作目になります。ヴェルディのオペラでは、愛、暴力、復讐、死がテーマとなっていることが主だと思いますが、大変にドラマチックですね。

「リゴレット」演出の構想を考える際、ストーリー上ポイントとなった事象や場面などはありませんか？

K・・・全体的なこととしてまず申し上げたいのは、「リゴレット」はとても過激な物語

台上には、ホテルのたくさんの部屋のドアが並びます。ホテルの階段や廊下は、半分は公共的なスペースであり、半分はプライベートな空間ともいえます。また、部屋の中には完全にプライベートで、ここではパーティを楽しむ金持ち族がいる一方で、リゴレットとジルダはホテルの屋上に住む、金持ち族とはまったく別世界に属する人間です。屋上に住むとは、公園に住む貧しいホームレスのような状態のことで、社会の主流から置き去りにされた人々です。これにより社会の二重構造、貧困層と富裕層を表現しようと思ひます。社会のコントラストをホテルという舞台設定を通じてお見せしたいと思ひます。

「ヴォツェック」は水が重要な舞台装置のひとつでしたが、今回「リゴレット」でそのようなものはありますか？

K・・・ホテルの部屋のたくさんのドアでしょうか。それと、常に「動いている」ということです。「ヴォツェック」では「静」でしたが、「リゴレット」ではいろいろな匿名の人たちがドアから出入り入ったり、廊下を行ったり来たり、階段を上り下りしたりして、常に舞台では動きがあります。

東京は、私にとって大冒険の場所

イタリア・オペラ、特にヴェルディのオペラと、ワグナーやベルクなどドイツ・オペラとは、演出の取り組み方や展開方法は異なりますか？



2009年「ヴォツェック」より ©三枝近志

K・・・異なりますね。ヴェルディはとても難しいです。ワグナーやドイツ・オペラと比べると、より難しいです。つい最近、私はヘンデルのオペラを演出しましたが、それよりもヴェルディのオペラの登場人物はとても情熱的で、とてもドラマチックです。まさにミステリー小説のようで、その情熱的な人物たちは、様々な出来事や、復讐などにも大いなる熱情をかけます。しかし、そういう人物像を演出するのは、とても興味深いです。

今回の指揮者はピエトロ・リッツォ氏です。これまでに一緒に仕事したことは？

K・・・リッツォ氏とは今回初めて一緒に仕事をすることになり、とても楽しみにしています。彼とはすでに会いましたので、今回の「リゴレット」での彼の音楽的解釈と私の演出がうまく相乗効果を発揮してくれると思っています。ご期待ください！

最後に「リゴレット」を楽しみにしている読者へひとことメッセージを

K・・・新国立劇場のオペラ・ファンの皆様を、とても嬉しく思っています。東京は、私にとって大冒険の場所でもあります。そこで私が初めて演出するヴェルディの「リゴレット」をオペラに造詣の深い、そしてオペラを心から愛している日本の皆様はどう受け入れてくださるか、今から緊張してわくわくしています！

Andreas Kriegenburg

ドイツのマグデブルク生まれ。ドイツ演劇界の鬼才にして、オペラ界でも斬新な試みによって数々の秀作を生む気鋭の演出家。1991年ベルリンのローザ・ルクセンブルク広場フォルクスビューネの所属演出家になり、1996年からハノーファー州立劇場、1999年からはウィーン・ブルク劇場で業績を重ねる。2001年からハンブルク・タリア劇場の演出部責任者を務め、2009年9月ベルリン・ドイツ座の首席演出家に就任。オペラはマグデブルク劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、フランクフルト・オペラ、バイエルン州立劇場などで演出。新国立劇場登場は2回目。